

源氏物語における敬語の特殊相

— 地の文における尊敬語の加除を中心に —

武原弘

源氏物語における敬語の問題については、既に先学によるすぐれた論考があり、近來、敬語法の一般原則からは外れているものと考えざるべき、いわば例外的な特殊相についても諸氏によってさまざまに検討が加えられてくるようになった。なかでも、玉上琢弥氏の「敬語の文学的考察」^(註)は、源氏物語における敬語の特殊相について、いわば描写論、文体論の視点から考察されたもので、きわめて示唆に富んだ高論であった。

敬語の問題は、もとより国語学上の問題であって、待遇理論がその考察の基礎をなすものである。殊に、源氏物語においては多くの登場人物の身分や地位に関する社会的序列構成が正確に叙述されていて、それに対応する待遇表現の体系にも殆どは乱れを示さないものである。が、各人物に固有の社会的身分・地位は、作中において常に一定不変ではあり得ず、場面の情況の推移展開につれてそれがまた推移変化することも確かである。すなわち、基本的には絶対敬語法を主としながらも、源氏物語では場面依存的ないわゆる相対敬語

の諸相があらわれてくる。場面場面での人物相互の待遇關係なしその意識が変化する以上、それに対応する敬語叙述の變化もまた当然とすべきではある。勿論、場面の推移展開に即応する相対敬語といえども、人物の社会的身分・地位がそれほど大きく変転するのではないから、絶対敬語の原則からみればあくまでも例外的・特殊的なケースに限られるものであることは言うまでもない。そのような例外的な敬語のあり方が、同時に、源氏物語の場面描写の多様さ文体の微妙さを反映するものであることもまた、われわれは見落してはならないのである。

相対敬語としての特殊相が最も端的な形であられるのは、人物相互の会話文であろう。特定の言語場面においてのみ会話は成立・機能するものであるからである。が、源氏物語の場合は、地の文においても相対敬語の諸相があらわれている。地の文で、同一人物に対して敬語が用いられたり、用いられなかったりする、いわば敬語の加除現象が見られるのである。

地の文における敬語の加除は、場面による人物の身分・地位の推移変化によつてのみならず、物語読者に対する作者の描写効果

源氏物語における敬語の特殊相 — 地の文における尊敬語の加除を中心に —

の意識にも微妙に関わっているのであろう。作中人物に対する待遇意識と読者に対するそれが二重に作用し合いからみ合つて、地の文の待遇表現が微妙化すると考えられるからで、その場合の読者に対する作者の待遇意識とは、単に読者の身分階層についての顧慮をさすのではなく、物語の享受者としての彼等に対する表現効果までも含んだものと解することができる。とりわけ、物語が作者に身近な読者ないし聞き手に物語られる文学であるならば、こうした現象はよりいっそうあらわれやすいのではあるまいか。いま、源氏物語が口語りの文学であつたか否か、にわかに断定はできないもの少くともその文体の基調として語り口調が読みとられる事實は否定できない。既に辻村敏樹氏が説かれたように、古代物語類に共通して見られる地の文の敬語が物語の口誦文学性と深く関わっている点は確実であり、源氏物語も当然その例外ではあり得ない。

地の文における敬語が、このようなさまざまの要因の相乗作用の結果、きわめて微妙な特殊相を見せてくることを考慮において、私はいま、物語の具体的な場面描写に即した考察を試みたい。特に、源氏物語のすぐれた場面叙法にあつて、地の文における敬語の加除が技法的にどのような効果を發揮しているかについて述べ進めたい。もとより、私の言う場面叙法の「場面」が、はたして源氏物語の作者に意識された段落・場面構成上のそれと一致しているかどうか、確定的ではない。(私は一応、内容上あるまとまりを示す比較的長い範囲を「場面」と見なしたのではあるが、「場面」という物語把握法そのものが現代的な解釈法であつて、中世の源氏物語享受において、例えば、一条兼良の「花鳥余情」によると、より短い

単位での文章を「段」と称している。)

さらに、本来敬語が用いられるべき部分に敬語が欠脱しているとする認定、その逆であるとする認定それ自体も、必ずしも客観的な根拠を得ているとは限らない。いま、青表紙本(古典文学大系本)をテキストとし、諸本における本文の異同を見ながら分析を進めることにする。引用中、——で敬語、……で無敬語の叙述を示し、敬語に関する異同のみ校異を見て傍記した。

二

既に玉上琢弥氏が指摘されたように、場面が緊迫した雰囲気表現する叙述においては、源氏物語は本来あるべき敬語を一部省くこととがしばしばある。その叙法によつて、人物の切迫した心理、急迫した場面雰囲気より効果的に表現することに成功しているのである。

(1)……母屋の際に立てたる屏風のかみ、ここかしこの、偶くしく、おぼえ給ふに、物の足音、ひしくと踏み鳴らしつゝ、後より寄り来る心地す。『惟光、とく参らなん』とおぼす。(夕顔、一—五)

前後に敬語を用いながら、「心地す」のみ無敬語となつてゐる。諸本とも異同はない。ものの怪の出現で急死した夕顔の亡骸を前にして、鬼気迫る闇の中で恐怖におののく光源氏の緊迫した心理を、作者は源氏と一体化する視点から叙したところで、効果的な描写となつてゐる。

(2)……「かぎりなう、心を盡くし聞ゆる人に、いとよく似たてま

つれるが、まもらるゝなりけり」と、おもふにも、涙ぞ落つる。

(若紫、一—185)

これは、幼い少女紫の上を偶然垣間見た光源氏が、藤壺に酷似しているその少女の容貌に見入って感涙にむせぶ場面の叙述であるが、「おもふにも」と無敬語で叙している。「涙ぞ落つる」も、「落つる」の主語が「涙」であることを考慮においても、本来何らかの敬語表現となつていてもよい部分である。やはり、源氏の瞬間的な感情の昂揚を効果的に、直接的に表現していると解してよい。

このような緊迫場面における敬語の省略文体は、他にも随所に散見され、特に柏木と女三宮、夕霧と落葉宮、薫と中君等の緊迫した情交場面においては顕著である。

注意すべきは、これらの場面における敬語の省略が、単に人物の緊迫心理表現の技法として効果的であるのみならず、物語描写における「場面」形成叙法としても生かされており、前後の文脈の中で調和的に叙せられている点である。例えば、若菜下巻における柏木について、敬語の用法をおさえてみたい。

(8)……下藪の更衣腹におはしましければ、心やすきかたまじりて

思ひ聞え給へり。人がらも、なべての人に思ひなずらふれば、けはひこよなくおはすれども、もとよりしみにしかたこそ、なほ深かりけれ。なぐさめがたき嫉捨にて、人目に咎めらるまじきばかりに、もてなし聞え給へり。(若菜下、三—366)

柏木と女三宮密通事件の始発を告げる条の、場面としては冒頭の叙述である。敬語の多用が目につく。以下の本文に、柏木と小侍従の長い会話が続くが、柏木に対する敬語待遇の原則はほぼ正しく守ら

源氏物語における敬語の特殊相——地の文における尊敬語の加除を中心に——

れている。しかし、場面がやがてクライマックスに至ると、

(4)……「なか／＼、かけ／＼しき事はなくてやみなむ」と、思ひ

しかど、……さかしく思ひしづむる心も失せて、……とまで、思ひ乱れぬ。……「わが率て来たる」とおぼえしを、「

何しにたてまつらん」と、思ふほどに、おどろきて、「いかに

見えつるならむ」と思ふ。(同、三—373～374)

とある。簡略過ぎる引用であるが柏木に対する無敬語の待遇表現が顕著である。諸本とも同様である。光源氏の正妻女三宮の寝所に侵入した柏木が激情に身をまかせて不倫の愛を迫る場面として、きわめて緊迫した雰囲気をよく描き出している。ここで柏木の言動に敬語を省いたのは、第一には彼の切迫した心理を叙するため、第二には女三宮の身分・地位と対比される彼の身分・地位の低さによるものであろう。さらには、そのような高貴な女三宮に対して不倫を犯せうとする柏木に対する作者の倫理的批判の意がこめられているのかも知れない。これらの諸要因の総合体として、文体はいわゆる相対敬語の相を示している。

ただ、物語本文をさらに追い続けていけば、この場面の終局に近くなるにつれて柏木に対する敬語表現が再び復活した様相を示してきている点に注目すべきであろう。

(5)……かむの君は、まして……起き臥し、明かし暮らしわび

給ふ。祭の日などは……ながめ臥し給へり。女宮をば、……

をさ／＼うち解けても、見えたてまつり給はず、わが方に離れ

るて、いとつれ／＼に、心細くながめ居給へるに、童べの持た

る葵を見給ひて……(同、三—378)

若干の異文はあるが、大勢は右に見るように敬語の頻用が目につく。この叙述で、物語は一つの「場面」を完結するに至るのである。

このような一連の叙述によって、敬語の加除増減は物語における「場面」の首尾を統一して、描写のまとまりを獲得しているのである。ここで、柏木の身分・地位に依存的な相対敬語の原理だけでは説明が困難であり、まして柏木に対する倫理的批判のあらわれを讀みとるのも不自然の感を免れない。何故なら、敬語の加除増減が比較的短い、一つの「場面」内で顕著な頻度を示しているからである。やはり、効果的な「場面」叙法のあり方として、「場面」の始発部で本来的な敬語用法に従い、「場面」性の最高度に強調される頂点において敬語の省略による心理描写を精密なものとし、さらにその終局において「場面」の安定を志向する作者の物語叙述方法と解されるべきであろう。

同趣の叙法について宿木巻一例、について考察しよう。

(6)……えつゝみあへで、寄る給へる柱のものと、簾垂の下よりやをらおよびて御袖をひかへつ。(女着「前大」)思ふに、何事かは言はれん。(言はれ給はん「別」)物も言はで、いとど、引き入り給へば、それにつきて、いと馴れ顔に、なからは内に入りて、そひ臥し給へり。(宿木、五―73―74)

最愛の人大君を失った薫が、その心底にある空洞を埋めるべき代償として、匂宮の妻中君に迫る場面である。ここでは、薫に対して中君に対して、敬語と無敬語が交錯しているが、場面が緊迫の頂点を描いているこの部分で、敬語を省いた青表紙本系統の本文が

正しいと見てよからう。ここでも、右の部分の頂点とする「場面」の首尾では、薫に対する敬語の待遇法は正當的な頻度で照応していることは本文に確かめ得るところである。

「場面」性が高度化する部分では、物語が人物の心理描写に集中していくことも、理の当然とすべきであろう。心理描写が有効的であるためには、その微妙な内面世界を必然なものとして納得せしめるだけの場面・情況の設定が前提条件だからである。その前提条件の設定段階で敬語を頻用しながら、場面の頂点に至る心理描写の部分で敬語を省いてその表現効果を高めるこの物語の文体・叙法は、作者の描写視点の問題とも微妙な関わりをもっている。

(7)……とおもへど、……など、さかしく思ふに、せかれず、今の間も、恋しきぞ、わりなかりける。さらに、見では、えあるまじく思え給ふも、返くあやにくなる、心なりや。すこし細やぎて、あてに、らうたかりつるけはひは、……とも思えず、身に添ひたる心地して、ことども思えずなりにたり。(同、五―75―76)

先の例(6)の後に続く条で、薫の心中思惟を叙した文である。「思ふ」について殆どが無敬語の表現である。ここでは、物語の作者は薫の内面世界に深く入りこんでいる。薫の内界の微妙な動揺を内側から精密に描写しようとする作者は、いま、薫と一応一体の視点にいる。かつて玉上氏が、若紫巻の垣間見場面の叙述を例として「作中人物に、読者が自己を没入し、彼(光源氏)の心をわが心と思ひ誤るに至らしめるために、敬語が省略される」(注)叙法を指摘されたが、ここでも事情は同様であろう。

また、このような濃密な心理描写場面において、例文(6)にも見られるように、人物が単に「男」あるいは「女」というように叙せられる点にも注意を払いたい。作者が人物の内面心理の精密な描写に集中するとき、作者にとって人物のもつ外的世界——社会的な身分や地位、それに基づく人物間の序列構成など——に関する意識を殆ど放棄し、一個の男性あるいは女性として抽象化して把握しようとするのである。人物と外部世界との具体的な関係形式が待遇の關係にはかならない以上、ここで人物に関する待遇叙述が捨象されるのもまた当然なので、敬語の欠腕はそのあらわれである。勿論、「男」「女」の表現が性的な表現世界と関わるものであることも確かなのであるが、いづれにしても、このような待遇超越的な人物把握とその描写もまた、極度に深化した「場面」叙法においてのみ可能であったことは確実である。

このように見てくれば、源氏物語における地の文の敬語の加除増減が、基本的に相対敬語としてのあり方を示すものではありつつもさらに特殊化してより高い表現効果を獲得するものであること、また、特にそれは、緊迫した人物の心理を効果的に表現するものであるのは確実であるとして、それが物語における「場面」叙法の全体に支えられてその特殊の機能を生かしていること、さらにそれが「場面」叙法として究極的に自在で柔軟な、生きた物語文体の形成に参与するものであることが、理解できるのである。

三

源氏物語において、特殊的是であるが典型的とも言える場面描写

源氏物語における敬語の特殊相 — 地の文における尊敬語の加除を中心に —

は、いわゆる垣間見の場面叙法である。垣間見叙法において、地の文における敬語はどのように特殊化されているか。

まず、若紫巻の例を引いて見る。煩雑を避けて簡略に引用したい。

(7)日も、いと長きに、つれづれなれば、夕暮のいたう霞みたるに紛れて、かの小柴垣のもとにたち出で給ふ。……中の柱に寄りゐて、脇息のうへに経をおきて、いと、なやましげに読みあたる尼君、たゞ人と見えず。四十余ばかりにて……いまめかきものかな」と、あはれに見給ふ。……中に、「十ばかりにやあらむ」と見えて、……走りきたる女で、(あまた)見えつる子どもに、似るべうもあらず……髪は、扇をひろげたるやうに、ゆらくとして、顔は、いと赤くすりなして立てり。……とて尼君の、見上げたるに、すこし、おぼえたる所あれば、「子なめり」と、見給ふ。……とて、「こちや」と言へば、ついでに。(若紫、一—183—184)

光源氏は敬語を以て遇され、尼君や少女(紫の上)は無敬語で遇されている。(引用はしなかったが、この場面の終り近い部分で光源氏の動作を「おもふにも、涙ぞ落つる」と無敬語で叙した叙述がある。前節を参照されたい。)河内本では、傍記のように尼君や少女について一部敬語を用いた本文もある。この場面では、尼君や少女と光源氏の出会いは全くの偶然によるので、女たちの身分や素姓について源氏も読者も全く知らされていない。ここより後の条で、僧都の口から尼君や少女の身分・素姓が語られることによって源氏ははじめて二人に敬語を用いて会話し、地の文においてもはつきりと

敬語があらわれてきている。身分・地位に対する待遇法である以上、青表紙本の叙述が正しいであろう。場面・情況の変化によつて敬語が用いられたり用いられなかつたりする、いわゆる相対敬語の例である。

ただ、ここで注意を要するのは、無敬語待遇の叙述にもかかわらず「尼君」という敬語が何度も用いられている点である。「たゞ人と見えず」との叙述と連接してこの語が「尼君」の由緒ある素姓を示唆した表現であることはまちがいない。玉上氏は「敬語というよりはむしろ、いわゆる丁寧語と見るべきである」とされるが、私はやはり敬語と見たい。それに応ずる下文の叙述に敬語がないのは確かに不自然ではあるが、ここは垣間見という特殊な手法による場面描写によつてゐるため敬語を省くのが原則的なのである。すなわちこの垣間見の手法において、描かれる対象世界はすべて光源氏の視点によつてとらえられ、作者の視点もそこに定位されている。いわゆる限定視点の方法である。相手の人物に関する予備的情報が皆無の光源氏の視点を通して物語が描写されているのであるから、当然敬語は付かない。しかし、「尼君」と叙述するときの作者の描写視点はそこから転移し、いわゆる全知視点にもどつてゐる。この視点の転移は、きわめてまれにはあるが、垣間見叙法の中で時折生起する現象である。敬語の変則的用法をもたらすのもそこに起因するものと考えられよう。いづれにしても、例外的な敬語と見るほかはない。(因みに、桐壺巻から幻巻まで通して、「尼君」の用例は三十九例あり、その中、地の文にあるのが二十九例、さらにそれが敬語の叙述を下文に伴うのは十二例で、敬語が省かれるのはきわめて

特殊な情況においてのみである。例えば明石尼について集中している。原則的には敬語法に従つて叙せられるものと考えてよい。)

橋姫巻の垣間見場面における敬語の用法はさらに特殊である。

(8)……あなたに通ふべかある透垣の戸を、すこし押しあけて、見

給へば、……うちなる人、ひとりは、柱にすこし隠れて、毳

毳を前におきて、撥を手まさぐりにしつゝ居たるに、雲隠れた

りつる月の、にはかに、いと、明くさし出でたれば……とて、

さしのぞきたる顔、いみじく、らうたげに、……その隠したる

人は、琴の上に、かたぶきかかりて、……とて、うち笑ひたる

けはひ、いま少しおもりかに、うち解けの給ひかはしたるけは

ひども、……と、つげ聞ゆる人やあらむ、簾垂おろして、み

な入りぬ。いみじうあてに、みやびかなるを、「あはれ」と、

思ひ給ふ。(橋姫、四―314―315)

別本では傍記の如く敬語を付しているが、他の諸本とも姫君の動作を無敬語で叙している。一か所「うち解けの給ひかはしたる」の部分だけは敬語表現になっており、諸本とも異同はない。この例外的な敬語使用も、先の若紫巻における「尼君」の場合と同様に解してさしつかえないであろう。

問題は、この場面において垣間見られている姫君の素姓・身分に関する予備情報を薫は既にある程度所有していること、読者にとつてもそれはほとんど自明的であつたこと、である。にもかかわらず唯一の例外を除いて、姫君の動作に敬語を用いた叙述をとらないのは何故だろうか、若紫巻の場合とは、少くとも条件はかなり異なつてゐるはずである。その理由として考えられるのは、読者にとつて

はじゅうぶん知られている姫君の素姓・身分であっても、いま覗き見る主体者としての薫にとってそれは必ずしも同様にじゅうぶんではない。薫の姫君の身分に関する予備情報としてはむしろ少ない。当然のことながら、薫と姫君との間に具体的な人間関係はまだ生じていない。したがって、薫の視点を通して描写される姫君は薫の意識の中で尊敬語で待遇される存在とは言えないのである。作者はそういう薫の視点に合わせて物語を叙述している。

ここで私が注目するのは、作中人物に対する待遇の叙述が、その人物の客観的な身分・地位の何如にかかわらず、地の文においてさえも場面的相対的なものとして施される点である。読者にとっては高貴な八宮の姫君であるにもかかわらず、この場面における薫にとってそれが関係の微少な存在であれば地の文においてさえ敬語を省くこの叙法は、逆説的ではあるが、きわめて読者依存的な方法と言えるであろう。何故なら、垣間見の手法によって読者は薫と同一の視点で姫君を覗き見る心理に引き込まれてきたはずであるし敬語のない叙述によって薫と姫君との最初の出会いを強調することが、読者に対して効果的だからである。

やがて薫が八宮との交際を深め、それと相まって姫君に関する情報を豊富にし、さらに恋の対象として見はじめる段階に至ると、同じ垣間見の場面においても、その叙法は一変してくる。

(9)……まづ、ひとり、たち出で、凡帳より、さしのぞきて、この御供の人々の、とかう行きちがひ、涼みあへるを見たまふなりけり。……と見ゆるは、著なし給へる人からなめり。帯、はかなげにしなして、数珠、ひきかくし持たまへり。……と、

源氏物語における敬語の特殊相 ―地の文における尊敬語の加除を中心に―

見おせ給へる用意、……とて、後めたげに、ゐざり入り給ふほど……(稚本、四一376/377)

ここでは、姫君に対する尊敬待遇法が支配的な叙述となっている。中に、無敬語の叙述もありはするが、それらは連用形や連体形で文が続いている叙述に限られているから、いちいち敬語を付けてなくても問題は無い。

対象人物の身分に関する情報が覗き見る主体にとって不じゅうぶんであれば、相手が誰と一応わかっているにもかかわらず、垣間見場面の中では敬語を用いて叙さない例として、今一つ、空蟬巻の場合を引きたい。

(10)……何にかあらむ上に着で、頭つき細やかに、小さき人の、ものげなき姿ぞしたる。顔なども、さし向ひたる人などにも、わざと、見ゆまじうもてなしたり、手つき、やせくとして、いたう、ひき隠しためり。……奥の人は、いと静かにのどめて……などいへど、……(空蟬、一一111/112)

この垣間見の後、本文は空蟬の寝所に侵入する光源氏の「すき」を場面の頂点にして展開しているが、そこでは空蟬に対する敬語待遇の叙述は見られない。場面が終末に至る条で敬語が復活した形となり、空蟬と光源氏の近接した人間関係を効果的に暗示するとともに場面叙法から見ても緊迫感から徐々に安定した結末へ及ぶ文体となっている。

他にも、薫がはじめて浮舟を垣間見る場面(宿木巻)においても覗き見られる浮舟に敬語は用いられていない。浮舟の現在の身分・地位にも関わるのもあるが、彼女に関する情報が薫にはまだそ

れほど多くはなく、既得の情報も未確認状態における浮舟とのはじめての出会いであることを、正確に物語ろうとする敬語法なのである。

しかし、源氏物語における多くの垣間見場面及びそれに進ずる覗き見場面が、常にこのような叙法に従っているわけではなく、むしろ一般的には敬語を伴った描写文による場合が多いのである。

(11) ……妻戸のあきたる隙を、なに心もなく、見入れ給ふに、……
愛敬は匂ひちりて、またなくめづらしき、人の御さまなり。御簾のふきあげらるゝを、人々おさへて、いかにしたるにかあらん、うち笑ひたまへる、いと、いみじく見ゆる。花どもを、心ぐるしがりて、之見捨て、入り給はず(野分、三一46)

夕霧にとって紫の上は既知の人であり、得ている情報も多い。この場合の覗き見はそうした既得情報の再確認、再認識にすぎなく、叙法としては反復強調法にも相当する。人間関係も既に一応は成立している、両者の行動範囲も狭い空間内に限定されている状態である。このような具体的な状況を踏まえた上で、本文は両者に対する敬語待遇表現をおろそかにすることはない。いちいちの原文引用は省くが、垣間見る主体と見られる客体との関係情況がこのようにほぼじゅうぶんに述べ語られてきた段階における垣間見場面で、敬語待遇を原則とした例は他にも多い。夕霧が玉鬘を盗見する場面(野分巻)、柏木が女三宮を簾の隙間に見る場面(若菜上巻)、藏人少将が鬚黒の大君・中君を垣間見る場面(竹河巻)、薫が女一宮を垣間見る場面(蜻蛉巻)等々である。

以上を要するに、源氏物語では同じ垣間見手法による場面叙法と

いえども、場面場面に応じて効果的な描写法が巧みに駆使され、敬語の使用法もそれにふさわしい変化を見せていることが判明するのである。そういう文脈においては、場面や情況の変化に対応するいわゆる相対敬語の原理がまず基本的に踏まえられ、さらに場面効果を高めるための特殊技法としての敬語の加除が行なわれ、それらの要因の相互機能の総体としての独自の文体形成を見ることができるのである。そのことは、源氏物語と他の古代物語作品と比較検討してみれば、なおさら明瞭になってくるわけで、物語文芸における作品形象度の深淺を測る、一つのメルクマールともなるのではなからうか。

四

宇津保物語における垣間見の場面叙法を見ると、周知のように伝奇的な傾向の強いこの作品において、現実的写実味を旨とする垣間見の手法そのものが少く、また、用いられている例を見てもそれほど効果的・文藝的なものではない。おそらく、垣間見の手法が物語の方法としてまだ定着、成熟していないのであろう。

(12) ……大将、此の折、宮達見奉らではいかでかと思ひて、……御屏の上よりのそげば、……二ノ宮は、御几帳の帷子は御達うち懸けて、……起き給ひていさゝかなる事せむと思し入り給へるを、いとよく見奉り給ふ。……姫宮も起き上がり給へるを、これはまだ小さくかたなりにてあてなり。よくも生み集め給へる皇子達かなと見て居給ひぬ。(国護下、三一206~207)

諸本とも敬語法についての異同はないようである。仲忠が、女一宮

を見舞った折に女二の宮をも垣間見て、その美しさに感動する場面であるが、相手の人物の素姓・身分が仲忠にもよくわかつている場面であるため、宮に対してもすべて敬語を以て待遇叙述している。のみならず、「思し入り給へる」の叙述のように、垣間見という条件にもかかわらず相手の思惟動作をも敬語で描写し、垣間見手法の独特の効果を發揮する限定視点法を無視している。叙法としてはやはり一面的と評せざるを得ない。

源氏物語以後の物語について、狭衣物語の場合はどうであろうか。この作品では、垣間見場面も相当に密度の高いものとなり得てはいるものの、そこでの敬語用法については特殊の技法は見られない。

(13) ……隈の間の障子のほのかなるよう、やはら見給へば、母屋の際なる御几帳どもも、皆をしやられて、……脇息に押しかゝりて、見出させ給へり、皇太后宮の御形見の色にやつれさせ給ひて、この比の枯野の色なる御衣どもの、……中〜なつかしう見ゆるは、着なさせ給へる人からなめりかし。ひきもつくるはせ給はねど、寝くたれの御髪の、こぼれかゝりたる肩のわたりなど、なを〜、様殊に見えさせ給ふ。(巻二―112〜113)

狭衣がかねてより恋慕してやまない源氏宮を垣間見る場面で、緻密な描写は有効的であるが、敬語法は場面全体に一貫してきわめて整然としている。やはり、宮の身分が明らかである場面故ではあるうが、一面において類型的な描写を思わしめる。(ただ、場面の終り近くで、狭衣の動作を「少し立ち退きて」と無敬語で叙している。日本古典全書(朝日新聞社刊)では「やをら立ち退き給ひて」とな

源氏物語における敬語の特殊相 ――地の文における尊敬語の加除を中心に―

って一致していない。源氏物語の場合でも、垣間見る主体の側の動作に時折敬語を省いた叙述を見ることがあるが、それは場面性が最も顕著となり覗き見る光源氏や薫の緊迫した心理を強調する叙法として効果的であり、狭衣物語においてそのような描写効果が得られているかどうかは疑わしいとしたい。)

(14) ……やをら立ち寄りて覗き給へば……脇息をししかゝりて經讀む人、「卅には足らぬ程にや」と見えて、いみじうけ高う愛敬づき、……薄色などの、いとあぎやかにはあらぬを着て、顔などもつくるひたることは見えぬに、……経をば讀みさしつゝ、『いと美し』と思ひて、うち笑みて見給へる気色など、『中将の母にや』と見ゆるに……(巻四―362〜363)

これは、狭衣が偶然、故式部卿宮邸で故宮の北の方を垣間見て感動している場面であるが、いま、覗き見ている対象の女が誰であるかその素姓・身分が狭衣にはよくわかっていない。そのため女に対しては原則として敬語が用いられず、一例だけ「見給へる」と敬語を用いている。諸本同じである。この敬語叙述は下文の「中将の母にや」と見た狭衣の心理状況と直接関連をもつ叙述と見られ、狭衣のその推測が当たっていることを表わしているのである。

垣間見に熱中する狭衣の心理も相当によく描写されており、効果的な叙法となり得てはいるが、場面全体としては厚みが少く、独立性も弱い上に、そのスケールの大きさ、写実的描写力の強さなどの諸点で、源氏物語の垣間見場面の効果には及ばないであろう。垣間見の場面が、物語の構成展開において人物の運命的な出会いの場面としてドラマティックに描写され得ていないと言ひ換えることもでき

るのである。

さらに、夜の寢覺の巻一には、中納言が琴を奏する中君を垣間見
る場面が見られる。場面設定としては源氏物語橋姫巻の場合とさわ
めてよく似ているところである。

(5)……軒ちかき透垣のもとに上げれる狛のもとにつたひよりて
見給へば、……長押におしかかりて、外さまをながめいで、
琵琶にいたく傾きかかりて掻きならしたる音、聞くよりも、う
ちもてなしたるありさま・かたち、いと気色ばみ、……筆の琴
人は、長押の上につきしひきいりて、琴はひきやみて、それに
よりかゝりて、西にかたぶくまゝに曇りなき月をながめたる、
……(巻一、一54)

この場面において、中納言は相手の女を但馬守の娘と勘違いしてい
るためでもあるう、どちらの女の動作にも一切敬語を用いていない。
加えて垣間見叙法という特殊性に規制されているために、対象世
界をすべて中納言の視点によってとらえ叙す作者の立場からも、当
然、女に対しては無敬語描写となつてゐる。ただ、読者にとつて
は垣間見られてゐる当の女が中君であることは既に明白となつてい
るため、垣間見の手法が完結する場面結末部においては、「やがて
まぎれて姫君を奥の方にひきいれ奉る」(同、55く56)というよう
に敬語待遇法で叙している。続く本文が「人心地もおほえす、むく
つけくおそろしきに、ものもおほえす。」(同)と叙せられるのは、
中君に視点を合わせてその切迫した心理をより効果的に表わす作
者の技法であり、その叙法はさらに「おぢやなくきて、きえいるや
うに泣きしづみたる気はひ」(同)と続くことによつてさらにその

効果を増している。とはいへ、読者に対しては女に關する情報を与
えておきながら中納言には情報なしの人違いの垣間見場面であるた
めか、叙法がやや類型化し、読者あるいは人物相互の情報度・心理
的近接度まで微妙に反映させる文体とはなっていない。源氏物語が
そうした情況の微妙さを正確に表わす柔軟で陰影の深い文体を示す
のに比べ、やはり夜の寢覺の場合及び得ていない。

以上は、垣間見場面という特殊な部分について、源氏物語と他の
物語作品との叙法・文体の比較をして、その敬語の用法のあり様
に相当の差異があることを見てきたのである。

このように見てくれば、源氏物語の敬語は対遇法を基本としなが
らも、場面場面の特殊性に著しく依存し、場面効果をもじゅうぶん
に生かし得る相對敬語としての一面を示していることがわかる。そ
の用法はきわめて特殊ではあつても、場面叙法効果より見ればき
わめて文芸的有効性を發揮するもので、同じ時代の他の物語作品と
比較することによつてそのことはいさうそう明瞭である。

源氏物語の文章におけるすぐれた表現技法を見ようとすると、
敬語の特殊相にまでおよぶ周到緻密な紫式部の計算とその表現効果
を知らされるのであるが、この問題をさらに深く探求するために
も、私は源氏物語世界の内面において、敬語の特殊相と文学形象と
の関わり方を、より具体的な事例の再点検を通して考察してゆきた
いのである。

本稿は、源氏物語におけるそのような文体効果を明らかにするた
めの予備的考察である。

注1 「国語国文」第二十一卷第二号(昭27・3)、 「源氏物語

研究」(「源氏物語評訳 別巻一」昭41・3 角川書店)

所収

2 辻村敏樹氏「敬語史の方法と問題」(「講座 国語史」

第5巻、昭46・11 大修館書店 所収)

3 注1に同じ。注4、5も同右。

なお、原文の引用には日本古典文学大系本をテキストに用い、諸本における本文の異同については「源氏物語大成」(池田亀鑑著)に拠って調査した。異文の略号も同書による。

追記

—本稿を草するに際し、稲賀敬二先生より多大のご助言を賜わった。心からお礼申しあげる。考察が不十分な点については、さらに続稿で補充したい。(昭和50・9)